

第 70 回ベルリン国際映画祭 ベルリナーレ・スペシャル部門正式出品  
「ソ連全体主義」の社会を完全再現する「DAU」プロジェクト  
前作『DAU. ナターシャ』は、序章に過ぎなかった——

DAU.  
ダウ  
退行

十年に一度の衝撃！ダンテの「神曲」になぞらえた  
全9章6時間9分、圧巻の黙示録

8/28[土]世界初劇場公開決定！&ポスター&予告編解禁！

映画史上初の試みともいえる異次元レベルの構想と高い芸術性が評価され、第70回ベルリン映画祭で銀熊賞（芸術貢献賞）を受賞した映画『DAU. ナターシャ』は、本年2月27日にシアター・イメージフォーラムほかで世界初となる劇場公開を果たし、ミニシアター・ランキングの上位に長期に渡ってラインクイン。前代未聞の手法でソ連全体社会を赤裸々に描き出した異色作としてヒットを記録し、全国45館で拡大公開された。

この度、続編公開希望の熱い声に応じて、「DAU」プロジェクトの劇場映画第二弾、『DAU. ナターシャ』で描かれた、ソ連全体主義社会のその後の世界を描く、  
『DAU. Degeneration（原題）』が邦題『DAU. 退行』に決定し、  
8月28日[土]より名演小劇場にて公開が決定。

ロシアの奇才イリヤ・フルジャンフスキーは処女作『4』が各国の映画祭で絶賛を浴びると、「史上最も狂った映画撮影」と呼ばれた「DAU」プロジェクトに着手。それは、いまや忘れられつつある「ソヴィエト連邦」の記憶を呼び起こすために、「ソ連全体主義」の社会を完全に再現するという前代未聞の試みだった。ウクライナの大都市で、かつてはソ連の重要な知性・創造性の中心地でもあったハリコフに欧州史上最大の1万2千平米もの秘密研究所のセットを作り、実にオーディション人数約40万人、衣装4万着、主要キャスト400人、エキストラ1万人、撮影期間40ヶ月、撮影ピリオドごとに異なる時間軸、35mmフィルム撮影のフッター700時間という莫大な費用と15年以上もの歳月をかけて「DAU.」の世界が作り上げられた。

この途方もないプロジェクトの劇場映画第一弾として完成した『DAU. ナターシャ』がコンペティション部門で上映された第70回ベルリン映画祭の別部門で上映されたのが、本作『DAU. 退行』だ。

実に6時間9分にも及ぶ大長編であり、『DAU. ナターシャ』が描き出したスターリン体制下の1952年から10年以上が経過した1966年～1968年が舞台となる。この時代はキューバ危機の後、フルシチョフ時代を経て、スターリンが築き上げた強固な全体主義社会の理想は崩れはじめ、人々は西欧文化にも親しむようになっている。

前作ではカフェのウェイトレスであるナターシャの視点で閉鎖的かつ断片的に描かれた秘密研究所だが、本作では一転、カメラは研究所内部に入り込み、様々な人々の複雑な人間模様や共産主義社会の建造物をよりダイナミックに映し出す。

今回公開されたポスタービジュアルには、二人の人物が写されている。右半分の顔は『DAU. ナターシャ』にも登場した老練なKGB（ソ連国家保安委員会）のウラジーミル・アジッポ、左半分の顔は優生学を基にした特別実験グループの被験者マクシム・マルツィンケビッチである。年代の違う二人の顔はまるで同一人物のように組み合わせられており、時代を超えて強固な意志を持つ「ソ連全体主義社会」を具現化したような顔にも見える。

また同時に公開された予告編では「共産主義は宗教だ。マルクス、レーニン、スターリンへの信仰。この宗教では進化のために退行し、革命のために破壊せざるを得ない」という冒頭で繰り広げられる宗教学者と科学者の対話の中のセリフで幕明ける。

この秘密研究所では年老いた天才科学者レフ・ランダウのもとで、科学者たちが「超人」を作る奇妙な実験を繰り返しているのだが、西欧文化の流入と共にかつては徹底的に管理されていた人々の風紀は乱れ、腐敗している状況が赤裸々に描き出される。しかし、

